

橋梁技術発表会 講演会

参加費
無料

定員
200名

申込
先着順

及び

講演会

第1部 技術発表	13:00~13:10	開会の辞	橋梁技術発表会 実行委員会 委員長 上原 正
	13:10~13:50	① 連続合成2主桁橋の設計例と解説について ~H29道示による設計もこれで大丈夫~	設計小委員会 小西日出幸
	13:50~14:00	休憩	
	14:00~14:40	② 天龍峡大橋(仮称)の工事報告 ~名勝「天龍峡」に架かる鋼上路式アーチ橋~	架設小委員会 長尾悠太郎
	14:40~15:20	③ もう、腐食なんかこわくない! ~適切な維持管理と対策で鋼橋は守れる~	保全委員会 貞島 健介
	15:20~15:35	休憩	
第2部 特別講演	15:35~16:35	応力聴診器の開発経緯と 「橋の聴診器」への期待と展望	名城大学 理工学部環境創造学科 准教授 小塩 達也 
	16:35~16:40	閉会の辞	(公社)土木学会 中部支部 支部長 小畑 誠

日時 令和元年 **10月11日(金)**
13:00~16:40

会場 **東建ホール・丸の内**
(東建本社3F) 名古屋市中区丸の内2-1-33

申し込み ホームページ(URL) <https://www.jasbc.or.jp/>
受付は令和元年8月30日~9月27日
※申し込みは、HPのみです。

連絡先 一般社団法人 日本橋梁建設協会 中部事務所
〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄4-6-15
フォーティーンヒルズセンタービル 日本ファブテック内
TEL 052-242-6060

継続教育 CPDS認定予定

開催地区 ●東京地区:10月 4日(金) ●東北地区:10月25日(金)
●中部地区:10月11日(金) ●北海道地区:11月 1日(金)
●大阪地区:10月16日(水) ●九州地区:11月 8日(金)
(6地区開催ですが、発表テーマは異なります)

資料配布 論文およびPPTのpdfは事前にHPにアップ致しますので、必要に応じて出力し持参願います。

【アクセス】



●名古屋市内営地下鉄 桜通線・鶴舞線「丸の内」駅下車
1番出口より徒歩1分

1 連続合成2主桁橋の設計例と解説について

「連続合成2主桁橋の設計例と解説」は、平成13年の発刊以来、連続合成桁の設計テキストとして多くの皆さまにご利用頂いて参りました。当協会では、平成29年の道路橋示方書(以下、道示)の改定に合わせて、まず単純合成桁の計算例である「合成桁の設計例と解説」を平成30年2月に改訂いたしました。本テキストは、その連続合成2主桁橋編となります。今回の道示改定では、許容応力度設計法から部分係数設計法へ移行しただけではなく、橋に求められる要求性能がより明確化され、耐荷性能の照査方法も大きく変わりました。ここでは、新旧道示による主桁断面の違いや、ずれ止め、横桁の設計等について分かり易く解説します。

2 天龍峡大橋(仮称)の工事報告

天龍峡大橋(仮称)は、一般国道474号三遠南信自動車道飯橋道路の一部として建設された鋼上路式アーチ橋(バスケットハンドル型固定アーチ)です。架橋地は名勝「天龍峡」に位置するため、周辺の景観に配慮して、通常のアーチ橋に比べて扁平でスレンダーな形状となっています。

本橋は、アーチリブをケーブルエレクション斜吊り工法で架設した後、アーチ径間の補剛桁とプレキャストPC床版をケーブルクレーンで架設し、側径間はトラッククレーンおよびクローラクレーンにより架設しました。架橋位置が名勝であるため、地形改変を最小とした架設設備としました。また、架設精度向上のために各種の取り組みを実施するとともに、JR飯田線直上の架設であったため、安全対策の徹底を図りました。

3 もう腐食なんかこわくない!

鋼にとって腐食(酸化)は自然現象であり、その備え、対応は鋼橋の維持管理上の永遠のテーマです。しかし、防食を考慮した構造の採用、適切な維持管理を行うことで腐食を防ぐことは可能であり、たとえ腐食が進行したとしても鋼橋は補修・補強が十分可能です。「もう、腐食なんかこわくない!」と題して適切な維持管理方法、補修・補強の事例を紹介します。

特別講演会 講演者紹介

名城大学 理工学部 環境創造学科 准教授 **小塩 達也**

講演テーマ

応力聴診器の開発経緯と「橋の聴診器」への期待と展望

【略歴】

平成9年 名古屋大学大学院修了(工学研究科土木工学専攻)
平成9年 三菱重工業株式会社 広島製作所製鉄機械設計部
平成10年 名古屋大学大学院 助手(工学研究科土木工学専攻)
平成19年 名城大学 助教(理工学部環境創造学科)
平成22年 名城大学 准教授(理工学部環境創造学科) 現在に至る

【専門分野】 構造工学・橋梁工学

【講演概要】

名古屋大学の助手時代に企画した、接着剤を使用せずに繰り返し使用できる簡易的なひずみ測定法が「応力聴診器」として製品化され10年以上経過し、現在、様々な形で利用されるに至っている。この技術を開発するに至った経緯や、これまでの「橋の聴診器」としての利用事例、開発事例を紹介するとともに、この聴診器にできること、できないこと、また、これを使いこなすであろう「橋のお医者さん」にはいったい何が必要なのかについて考える。

令和元年度

橋梁術発表会

中部地区

10月11日(金)

参加申込方法▶



一般社団法人 日本橋梁建設協会
Japan Bridge Association

ホームページよりお申込み下さい。

<https://www.jasbc.or.jp/>

「技術発表会」
の申し込みはこちら。